



福島は語る

『沈黙を破る』『異国に生きる』『飯舘村』
土井敏邦 監督作品

証言ドキュメンタリー映画

「福島は語る」上映会

日時:2020年1月31日(金)17:00~20:30

場所:人間科学研究科東館106号室

参加申込:先着40名(事前申込優先)

【主催】附属未来共創センター未来共生プログラム

【申し込み】

下記のQRコードから申込フォームへ



【問い合わせ】

担当:石塚 y-ishizuka@hus.osaka-u.ac.jp



第一章「避難」

「自主避難」をめぐる家族間の軋轢と崩壊、他県で暮らす避難者たちと福島に残る人びととの乖離、避難生活の厳しさや苦悩に引き裂かれていく福島出身者たち。



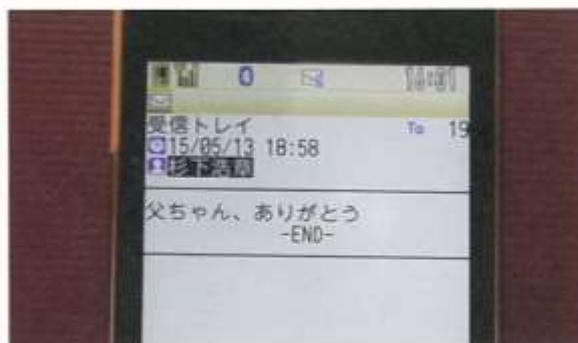
第三章「悲憤」

「補償」の負い目と“生きがい”の喪失。「湯村宣言」で補償を打ち切られた生活苦と先の見えない不安と病苦。“自死”の誘惑が脳裡を過ぎる。



第五章「学校」

避難し各地に離散した教え子たちに手書きの「学年便り」を送り続けた教師。差別を恐れ「原発所在地」出身だと名乗れない子どもたち。



第七章「喪失」

「帰還困難区域」となった飯館村・長泥で、家と農地、石材工場を失った住民。追い打ちをかけるように、将来に絶望した跡取り息子を失う。原発事故で「人生を狂わされた」被災者の備忘。



第二章「仮設住宅」

4畳半一間での独り暮らし孤独感と先が見えない不安。「避難解除」され「仮設」を出ても、大家族が共に暮らす元の生活に戻れない絶望感。



第四章「農業」

「福島産だから」と避けられる農産物。福島を想いながらも他県産を求める自責と葛藤。農家は“農業と土への深い愛着”と、経営破たん危機の間で揺れ動く。



第六章「抵抗」

水俣病と同様に被害を隠蔽し矮小化する国家の体質。“尊厳”のために闘う沖縄に、福島の間いを重ね合わせる反原発運動のリーダーの抵抗。



最終章「故郷」

「住民の一人ひとりの半生を全てを知る」故郷。「汚染されても美しい」故郷。原発事故が福島人に突き付けた“故郷”の意味。